

# ベトナムにおける先史文化の考古学的研究とその資源化に関する研究

吉田 泰幸（人間社会研究域 博士研究員）

## 1. 派遣日程・訪問先

派遣期間は2010年8月30日から11月1日であった。ベトナムの首都・ハノイにあるベトナム考古学院を起点に、先史時代遺跡やベトナム北部の主な省都に所在する博物館を訪問した。

## 2. 文化資源学としての考古学

筆者は、現代考古学研究は以下の3つの視座から行われていると考えている。1) 研究対象に対して客観的なまなざし。初期の文化史的考古学や、プロセス考古学がその代表(図1-①)、2) 遺跡・遺物を残した人々の思考をも問題にする視座<sup>1)</sup>。解釈学を重視したポスト・プロセス考古学や、そのリアクションとしての認知考古学、景観考古学を含む(同②)、3) 考古学者の研究活動を含む、考古学にまつわる社会的行為全体を研究するメタ的な視座(同③)の3つである。そして、考古学者を含む人々が、過去の人々が残した遺跡・遺物と取り結ぶ関係(同④)に関わっていくことが、考古学における文化資源学の実践になるだろう。以前から行われているこの種の活動を、近年は「パブリック・アーケオロジ」という独立したサブテーマとすることもある。その際には、上記の視座1)、2) から得られた成果がもとになり、さらに3) の視座から得られた知見もフィードバックされることになる。このよ

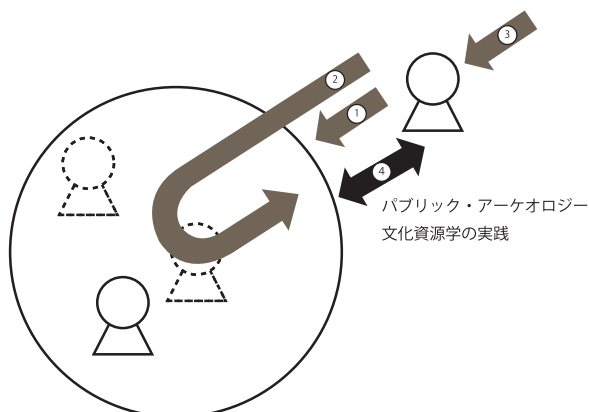


図1 文化資源学としての考古学

うに整理すると、現代考古学の3つの視座から行われる研究とパブリック・アーケオロジは、前者が文化資源学としての考古学の基礎部分、後者が応用部分と位置づけられる。本報告は、基礎部分の3つの視座それぞれを意識しておこないたい。

## 3. 研究対象・地域

先史時代は字義的には文献史で扱う以前とされる。その線引きは明確にできないが、東アジアにおいては古代中国文明との接触が区分の指標となり得る。古代中国が周辺社会を文字で記述するようになるからである。現在の北部ベトナムにあたる地域には、この地が最初に文献上に現われる6世紀の地誌『水経注』等から、「文郎国」なる政体があったとされている。本報告であつかうのは、それ以前に展開した諸文化、北部ベトナムにおける新石器時代後期に位置づけられる Phung Nguyen 文化 (B.C.2000 ~ 1000)、初期青銅器時代の Dong Dau・Go Mun 文化 (B.C.1000 ~ 500)、そして「文郎国」と同一視されることもある、本格的な青銅器時代 Dong Son 文化 (B.C.500 ~ A.D.100) である<sup>2)</sup>。

滞在中、図2中1~16の諸遺跡出土の考古資料を元に、上記の視座1)、2) から、当該期を特徴づけるもののひとつである玉文化の研究<sup>3)</sup>をおこなった。中でも、Tranh Kenh(図2-13)、Bai tu(同10)、Hong Da(同6)遺跡は玉器の製作遺跡として著名である。また、視座3) からの研究は、遺跡・遺物と取り結ぶ関係の一形態と言える、同A~Iの省都所在博物館における<sup>4)</sup> 展示空間を中心に、先史時代考古資料をもとにした表象について検討をおこなった。

## 4. 北部ベトナム新石器・青銅器時代における玉文化の研究

北部ベトナム新石器・青銅器時代における玉文化の主要文物は Vong Da (「環石」の意) である。現地を観察できた資料をもとに、それらの製作技術、変遷の

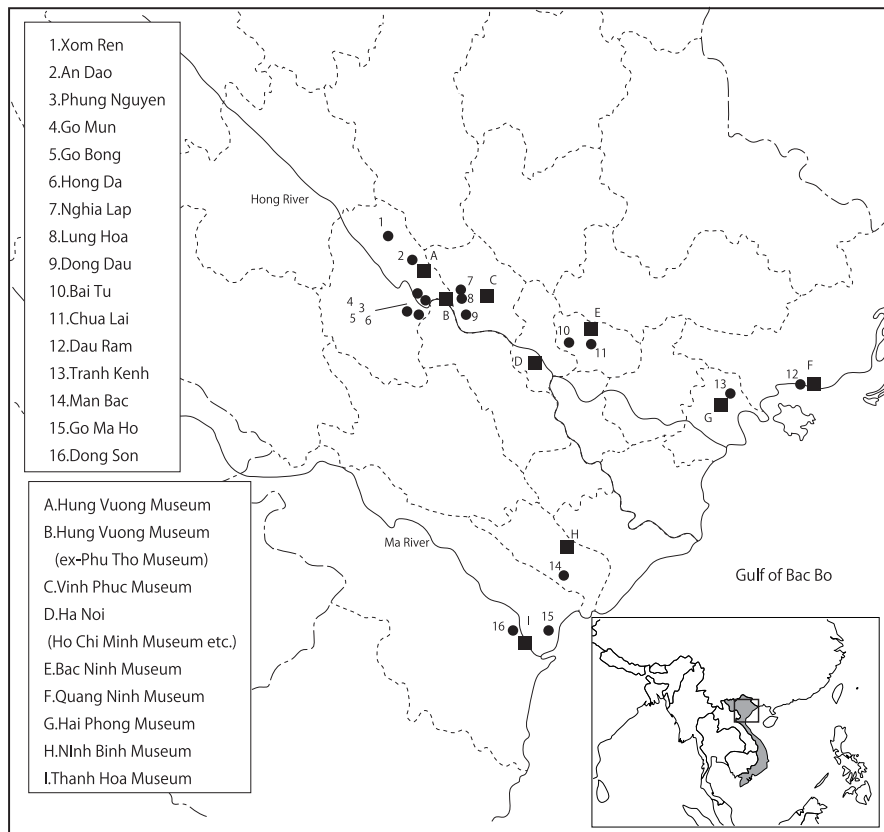


図2 研究対象地域 (1～16：先史時代遺跡、A～I：博物館)

V1-1：断面形態が平らで薄いもの。大半が欠損品であり、欠損した端部を磨いてあったり、補修孔があるものが多い (同 3.4)。3のように、両端部に穿孔をほどこし、中国玉器の「璜」のような形状を呈した再生品もある。ただし、「研磨された欠損端部」は玦状耳飾の切り込み部である可能性もある。両者の線引きは明確にできないが、玦状耳飾が V1-1 製作と同一工程で生み出されたことも示唆している。

V1-2：断面形態が正方形に近いもの。V1-1 同様、欠損品、欠損した端部を磨いた再利用品とおぼしきものが多い (同 5・6)。  
V1-3：断面形態が縦に長い長方形のもの。V1-1・2 同様、欠損品、欠損した端部を磨いた再利用品とおぼしきものが多い (同

整理を試み、関連する諸問題を指摘したい。

### ・概要と形態分類 (図 3)

Vong Da の製作技術には 2 種類あることがすでに Nguyen Thi Kim Dung によって指摘されている (Nguyen.K.D1996)。これをもとに関連文物を含め以下のように分類する。

L1：Vong Da 製作時には、中心部分を丸く削り抜いた廃材として Loi Vong (「芯環」の意) が生み出され、これらが各遺跡から多く出土している。上下両面が平滑に研磨され、両面から管鑽 (詳細は後述) された類を、Loi Vong の頭文字をとって L1 とする (図 3-1・2)。その直径は様々であり、最小値は 0.9cm、最大値は 5.5cm であった。ネフライト製であり、白色のものが多いが、薄く黄色、緑色を帯びたものも用いられ、黒色に近いものもある。

以下の V1-1～6 (Vong Da の頭文字をとった) は L1 同様にネフライト製であり、L1 を生み出すような工程で製作されたと考えられ、これらを V1 系とする。Phung Nguyen 文化を主体とする遺跡から多く出土する。断面形態をもとに分類した。

7・8)。

V1-4：断面形態下端が上端よりも長いもの (同 9・10)。再利用品とおぼしきものはなかった。

V1-5：断面形態 T 字形のもの (同 11・12)。11 に示したような補修孔をもつものがある。

V1-6：細かい隆線が複数めぐるもの (同 13)。そのうちの中心の隆起が非常に高く、V1-5 同様断面 T 字形を呈するものもある。

L2：Loi Vong (「芯環」の意) のうち、片面のみ平滑に研磨されたもの。もう片方の面は敲打された面がそのまま残り、不整形である (同 14・15)。直径の最小値は 2.8cm、最大値は 5.1cm であった。石材は石斧などに用いられているものと同様である。以下の V2-1～3 製作時に産出された廃材と考えられ、これらを V2 系とする。Phung Nguyen 文化に後続する Dong Dau、Go Mun 文化を主体とする遺跡から多く出土する。

V2-1：断面形態が方形のもの (同 16)。

V2-2：断面形態が三角形で、中心から端部にかけてなだらかに厚みがなくなる (同 17・18)。

V2-3：断面形態が V1-5 同様 T 字形であるが、明瞭な

T字形をとらないもの（同19・20）。V2-2にくらべて、急に端部に向けて厚みがなくなる形態をなしている。

関連製品として、Khyuen Tai（耳飾の意、当該期では珓状耳飾のことを指す）と Hat Chuoi（管玉）がある。

Khyuen Tai は V1 系同様に白色ネフライトを用い

るものは V1-1 と同じ平らで薄い断面形を呈する（同21・22）。Phung Nguyen 段階のものと考えられる。

Dong Dau 文化の標識遺跡である Dong Dau 遺跡からは、厚みや断面形が多様な珓状耳飾が出土しているが（同23～25）、やがて片面に明瞭な稜をもち、そこから端部にかけて厚みを減じる形態の珓状耳飾が主

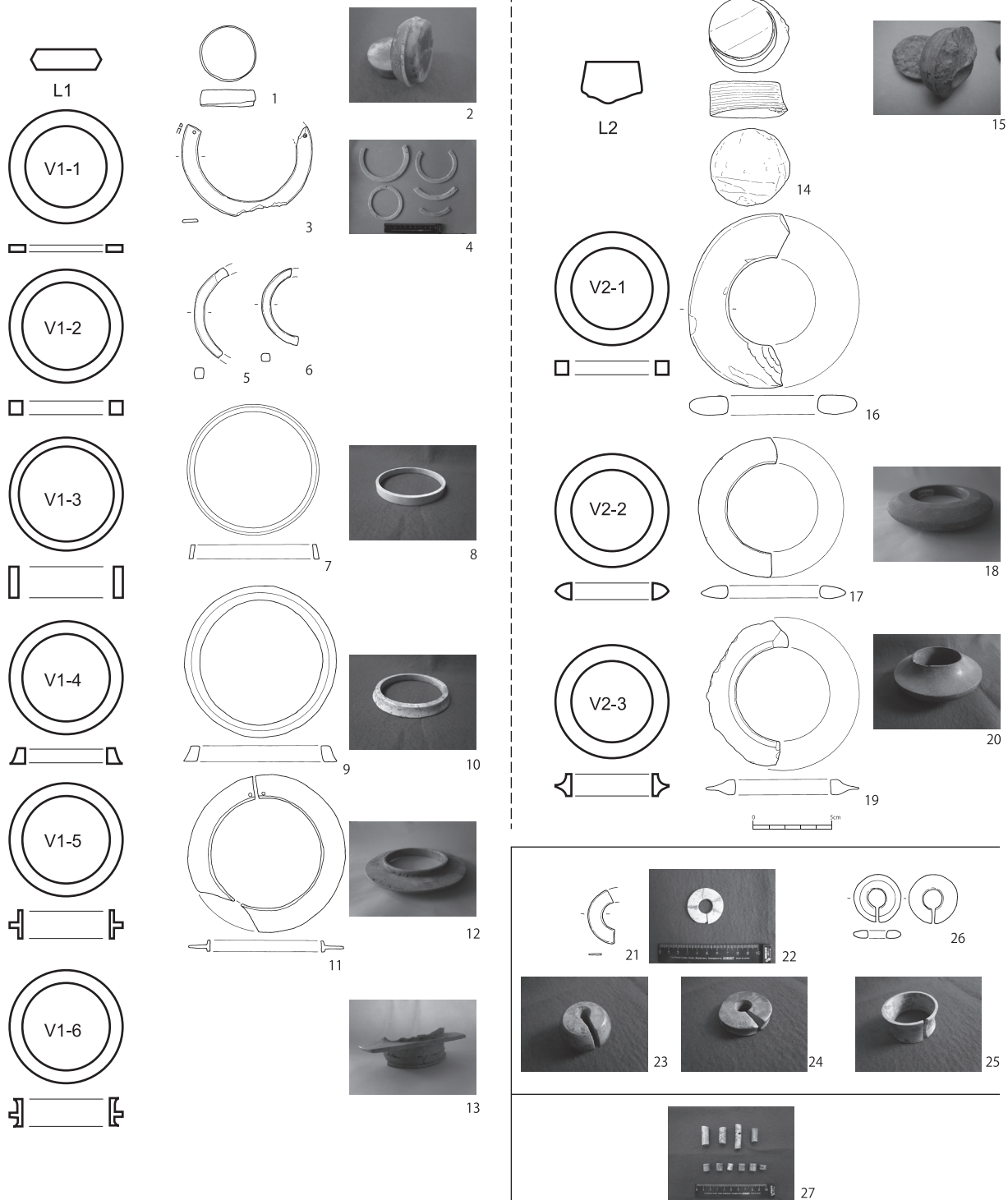


図3 Vong Da および関連遺物（実測図は縮尺4分の1、写真は縮尺不同）

1・2・7～10：Hai Phong 市 Thanh Kenh, 3・4・12・13・18：Phu Tho 省 Xom Ren, 5：Quang Ninh 省 Dau Ram, 6・11・21・27：Ninh Binh 省 Man Bac, 14・16・17・19：Thanh Hoa 省 Go Ma Ho, 15：Phu Tho 省 Hong Da, 20・24～26：Vinh Phuc 省 Dong Dau, 22：Bac Ninh 省内, 23：Phu Tho 省 Go Bong.

体となったようである（同 26）。この特徴は後続する Dong Son 文化期の玦状耳飾も有する。石材はネフライトとおぼしき石であるが、前段階と異なり白色主体ではなく、濃緑色が主体となる。この段階は、耳飾製作が Vong Da 製作工程とは別工程になったと考えられる。前述の Dong Dau 出土の多様な形態は、模索期の所産とも考えられる。こうした推移の中から、後に東南アジアの広い範囲で特徴的な形態となる、端部に複数突出部を有する有角玦状耳飾（リンリンオー、Ling Ling-O）の祖形と思しき耳飾も生み出されたのだろう。

Hat Chuoi（管玉）は V1 系同様ネフライトが使用される（同 27）。白色、あるいは薄い緑色のものが多用される。

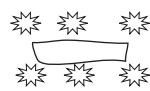
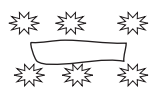

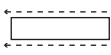


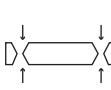
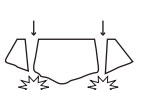

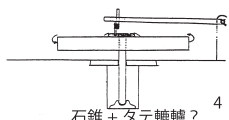
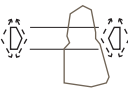
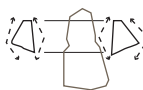




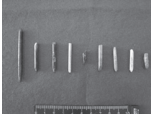
・製作工程と関連文物（図 4・5）

Vong Da の V1 系、V2 系とも、工程は同様で、「粗成形」→「研磨成形 1」→「管鑽」→「研磨成形 2」という順序であろう。両者の差異は「研磨成形 1」と「管鑽」工程にある。

「粗成形」では敲石（図 4-1）が工具として用いられ、鹿角等と組み合わせて間接打法で分割、成形されたことが想定される<sup>5)</sup>。「研磨成形 1」では V1 系は両面を研磨し、V2 系では片面のみである。大型の砥石（同 2）

が用いられていたものと考えられる。「管鑽」段階は、V1 系では両面から、V2 系では片面からのみおこない、後者では最終的に敲打して削り抜いたと考えられるが、使用工具ははっきりしない。前述の Nguyen Thi Kim Dung 著作の中では、石錐とタテ轆轤を用いて管鑽する復元図（同 4）も提示されている。確かに錐状の石器は製作遺跡から出土しているが、これらは補修・再利用の工程や後述の Hat Chuoi（管玉）における穿孔にのみ用いられ、Vong Da の「管鑽」に際しては、竹のような筒状の工具が用いられた可能性も否定できない。最終工程の「研磨成形 2」では、「管鑽」後の孔部を滑らかに成形することと、外面形状を整えることが必要になる。特に前者に用いられた可能性が高いのが、製作遺跡から出土している浅く広い幅の溝を帯状に有する砥石（同 5・6）である。「管鑽」後の孔部側面を滑らかにするために用いられた結果、Vong Da の高さに近い幅の浅い溝が形成されたと考えられるからである。破損後に「補修・再利用」の工程が加わることがある。再利用の例は多くの V1-1 にみるように、垂飾が考えられる。どちらも小さな穿孔をほどこす必要があり、主要工具としては石錐（同 7）が該当する可能性が高い。

「粗成形」で生じるネフライト塊から、Hat Chuoi（管

工程	V1 系	V2 系	工具
粗成形			 1 敲石 + 鹿角等?
研磨成形 1			 2 砥石
管鑽			 3  4 石錐 + タテ轆轤? 竹?
研磨成形 2			 5 砥石  6
補修・再利用			 7 石錐 + 砥石

←-----→ 研磨      ✨ 敲打      ↓ 管鑽・穿孔

図 4 Vong Da 製作工程（実測図は縮尺 4 分の 1，写真は縮尺不同）

1：Thanh Hoa 省 Ma Hoi，2・5：Bac Ninh 省 Bai Tu，3：Phu Tho 省 Hong Da，4：石錐と轆轤使用の想定復元図，6・7：Hai Phong 市 Tranh Kenh.

工程	管玉未製品	工具
粗成形		敲石 + 鹿角?
摺切 + 研磨成形		 石鋸 + 砥石
穿孔		 石錐

図5 Hat Chuoi 製作工程 (実測図は縮尺4分の1, 写真は縮尺不同)  
1~4: Hai Phong 市 Tranh Kenh.

玉)も製作されたであろう(図5)。未製品をみると、摺切技法による切断と研磨がおこなわれたことがうかがえる(図5-1)。前者には、製作遺跡から出土している石鋸(同2)が用いられたであろう。穿孔は石錐によるものと考えられる。石錐の直径は4mm程度のものが多いが、Hat Chuoi(管玉)の孔の直径もその程度のサイズのものが多い。

Phung Nguyen 文化における球状耳飾は、V1-1に石鋸で以て切り込みを入れたものであろう。次段階における球状耳飾の製作工程は、Pre-Dong Son 文化期の

製作遺跡である Thanh Hoa 省 Nui Sen 遺跡出土品(ハノイ国家大学人類学博物館にて展示品を見学した)において「管鑽」が用いられていることが未製品、Loi Vong の存在からうかがわれた。ただし、Phung Nguyen 期とは異なり、Vong Da 製作工程からは切り離されていることも同時にうかがわれた。

#### ・Vong Da の用途(図6)

Vong Da(環石)はしばしば Vong Tay(腕輪)、Vong Nhan(指輪)、Vong Tai(耳輪)と、明確な用途を示した名称がつけられることがあるが(博物館展示も同様)、その基準は明確ではない。サイズの測定・分析が用途推定の重要な方法になるだろう。Vong Da が人骨に伴った例は筆者の知り得る限り、Dong Dau 遺跡例のみである。熟年男性の右手に V2-2 が装着された状態で出土し、その内径は5.6cmである(Nguyen. L.C.et al.2003、図7-2)。これが用途推定の基準となり得るが、1例のみであるため、日本列島の縄文時代貝輪、弥生時代貝輪の小児・成人装着例の内径サイズと比較した分析をおこなった<sup>6)</sup>。

結果、それらのサイズ分布とほぼ重なり、腕輪に特化し得ると考えられる形態として V1-3~6, V2-1~3 が挙げられ、サイズ分布が重ならず、腕輪としての装着を前提にしていなかったと考えられるものとして V1-1・2 が挙げられる。以上から、V1系(Phung Nguyen 段階)から V2系(Dong Dau、Go Mun 段階)の変化は、腕輪としての使用に Vong Da が特化してい

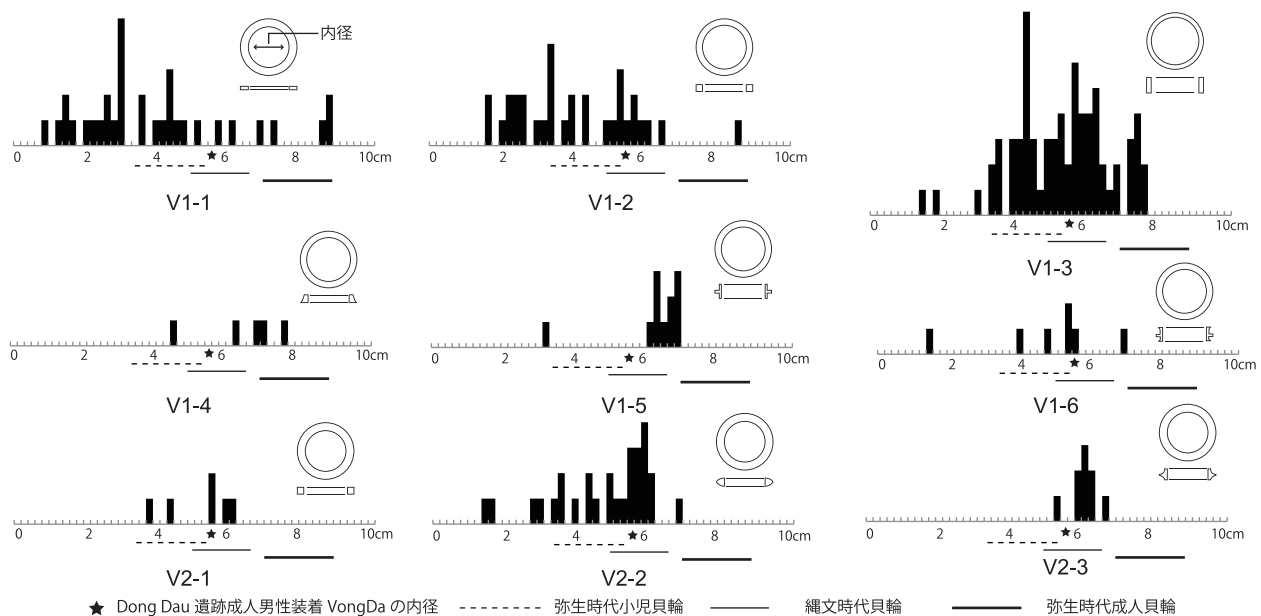


図6 Vong Da 内径と人骨装着 Vong Da と縄文・弥生時代人骨装着貝輪内径比較図

った過程、とも捉えられる。ただし、小児・成人とも装着していたかどうかは、描かれる社会像も大きく異なってくるため、今後の出土例に期待したい。

### 5. 玉文化の変遷試案

以上の様相をまとめた図7をもとに、玉文化の変遷について推測を交えて述べたい。Phung Nguyen 段階では Vong Da と珉状耳飾は同一工程の中で製作され、Vong Da の一部に切り込みを入れたものが珉状耳飾として使用された。V1-1・2 は身体に装着する以外に所有すること自体に意味があった製品としての位置づけか、あるいは垂飾として使用されることが多く、破損品に穿孔し垂飾として再利用することがあった。V1-3～6 は腕輪としての使用がされることが多くあった。V1-1 と V1-5 は Phu Tho 省 Xom Ren 遺跡において、中国起源の玉器である牙璋<sup>7)</sup>とともに土坑から一括で出土している(図7-1)。遺体が腐朽したものとみなしてそれらの配置に着目すれば、V1系諸形態の中の使い分け、という上記の推定もあながちの外れで

はないだろう。Dong Dau 段階以降、珉状耳飾製作と Vong Da 製作が分離すると考えられる。V2系は腕輪として使用されることが多くあった(同2)。この時期には使用石材が白色ネフライト中心から、珉状耳飾は濃緑色のネフライト、Vong Da は石斧同様の石材に変化する。この Phung Nguyen 段階から Dong Dau 段階にかけての石材変化のひとつの要因として、産出地との関係変化が考えられる。

図8は漁網錘の東アジアにおける拡散図にベトナム周辺の地図、関連する文物を重ね合わせたものである。これらから、北部ベトナムの玉文化をより広い視野から検討したい。

Vong Da 同様の石製品(図8-1)と丸く石を刮り抜く「管鑽」技術を示唆する廃材・石器群(同2～4)は、中国遼寧省大連市文家屯遺跡でも確認できる<sup>8)</sup>。同遺跡は B.C.2300 ごろと位置づけられている。紅河(Hong River)周辺の Phung Nguyen 文化よりも先行しているため、この技術の起源地は現在の中国のどこかに求められるだろう。

ManBac 遺跡で確認できた管状土錘(同6)・揚子

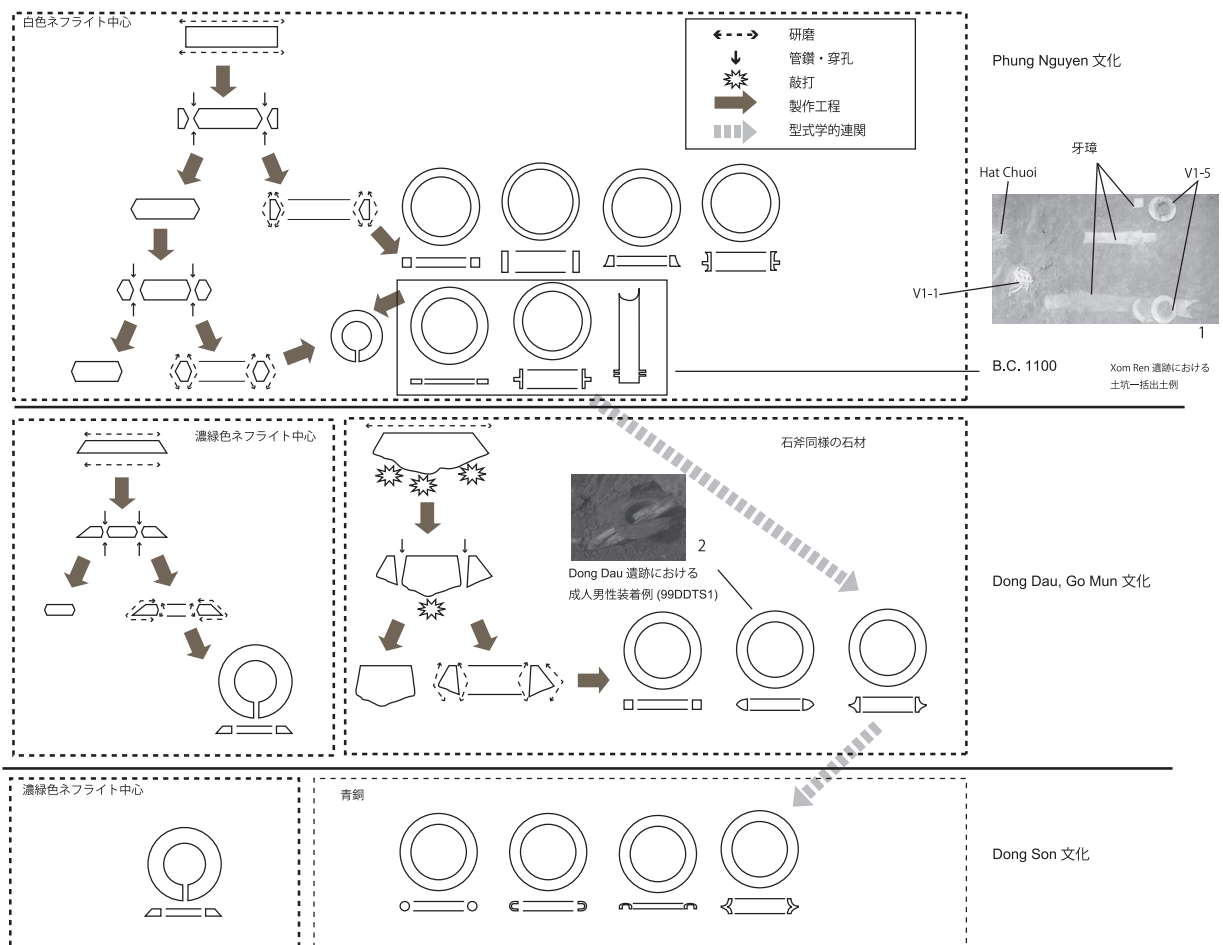


図7 北部ベトナムにおける Vong Da を中心とした玉文化変遷図

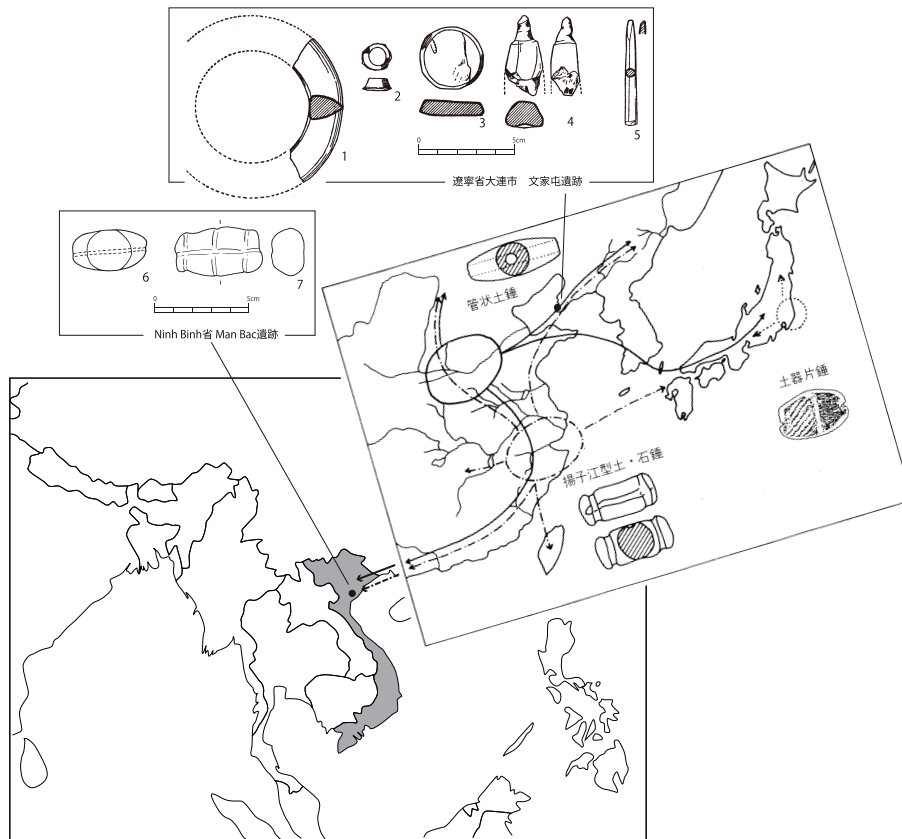


図8 東アジアにおける「管鑽」技術と漁網錘（文家屯遺跡資料は渡辺正 1958、漁網錘地図は渡辺誠 1983 より）

江型石錘（同7）も、古代中国諸文化から各種文物等の流入があったことを示唆する例と考えられる。近年、Man Bac 遺跡出土人骨を基にして、新石器時代後期に現在の中国由来のヒトとの混血があり、その混じり合った人々が現代東南アジア人の直接の祖先になった可能性が、「東南アジアにおける二層構造モデル」として形質人類学から提示されている（Matsumura, ed. 2006）<sup>9)</sup>。玉文化や漁網錘の展開も、そうした仮説を検討する一要素となり得るだろう<sup>10)</sup>。また、Vong Da のサイズを日本の貝輪と比較した際、日本列島石器時代人骨とベトナム先史時代人の体格差を考慮に入れていないが、上記仮説と関係して、当該期の紅河周辺の人々の体格の変化等も検討課題と考えられる。腕輪として適当なサイズも体格に左右されると考えられるからである。

## 6. 玉文化変遷の背景

上記が冒頭で述べた視座1)からの検討である。視座2)の往時の人々の認識をも問題にする視座から、玉文化変遷の背景を考えてみたい。

Vong Da に用いられる石材が変わるということは、供給地における原材料の枯渇をはじめとした、供給地

との関係が変化した結果とも考えられるが、付随して、往時の人々の玉器に関する価値観が変化した可能性も考慮に入れる必要があるかもしれない。使用石材の色調変化、Vong Da の形態やサイズの変化が示唆する身体表象の変化は「文郎国」と称されるような政体成立の胎動期における、当地域の独自性やアイデンティティの発露と関係するところがあるのか等々、現段階ではこうした問題設定の前に、玉文化を必要とする社会の社会進化論的位置づけの方が優先されるかもしれないが、こうした視座からの検討も今後の課題として挙げておきたい。

## 7. 博物館展示におけるドンソン銅鼓

Antiquity73号における”Heritage and Archaeology in the Far East”特集の中で、Fumiko Ikawa-Smith は「アメリカ考古学は anthropology 以外の何物でもなく、東アジア考古学は national history 以外の何物でもない」という言葉を引きながら、考古学と National Identity の関係として、以下の3種類を挙げている（Ikawa-Smith, 1999）。

モデル1：中国、ベトナム、北朝鮮に顕著な The



図9 博物館における Dong son 銅鼓

indigenous development model (土着発展モデル)  
 モデル 2：日本において顕著な The continuity with assimilation model (同一性連続モデル)  
 モデル 3：韓国において顕著な The single ancestral antecedent model (単一始祖系譜モデル)

これを資源化のメカニズムを読み解く補助線として、現地で訪問した博物館における先史時代考古資料をもとにした表象を検討した。

それらの特徴として、北部ベトナムの各博物館では、ホー・チ・ミン像あるいは「文郎国」の始祖とされるラックロクワン・アウコ像と、Dong Son 文化の銅鼓および銅鼓の鼓面文様（ベトナムにおいて最も古式の Ngoc Lu <ゴクルー> I 鼓であることがほとんど<sup>11)</sup>）の重要視や同時使用が多くみられることが挙げられる。

図 9-1 はハノイ市内のホー・チ・ミン博物館の入口ホールに置かれた復元銅鼓（ゴクルー I 鼓と同じ鼓面文様をもつ）である。その側面には、ホー・チ・ミン

年代記が描かれていた（同 2）。近代ベトナムの始祖ホー・チ・ミンの人生が神話化した例とも言える。同 3 はハノイ市内の民族学博物館だが、平面形が円形の本館は銅鼓館と言われている。同 4 は Hung Vuoug 博物館（図 2 - A）入口吹き抜けホールに置かれた銅鼓で、吹き抜けを飾るモザイク画には初代雄王誕生にまつわる神話が描かれている。同 5、Hung Vuoug 博物館（図 2 - B）の吹き抜けホールにはアウコ・ラックロクワン像（雄王の両親）の上に銅鼓の鼓面文様のレリーフが配置されている。同 6 は Hai Phong 市博物館入口のホー・チ・ミン像と復元銅鼓（像背面には鼓面文様のモチーフ）。同 7 は Ninh Binh 省博物館入口上の鼓面文様レリーフ、同 8 は Quang Ninh 省博物館入口のホー・チ・ミン像と鼓面文様レリーフである。

古代中国の影響以前に独自の文化を有していた象徴として銅鼓が使われているのは上記モデル 1 の特徴をよく示している。加えて、それが近代ベトナム発展の象徴としてのホー・チ・ミンに結び付けられているの



図 10 タンロン・ハノイ千年祭における Dong son 銅鼓等





図 11 プロパガンダ・アート販売店

は、モデル 2、同一性連続を志向する特徴も併せ持っている<sup>12)</sup>。この重層性が北部ベトナムの博物館展示における、先史文化をもとにした表象の特徴と言えそうである。

## 8. ハノイ市内における銅鼓モチーフ

2010 年は現在のハノイにタンロン皇城が築かれてから 1000 年の記念の年で、前年に世界遺産に指定されたこともあり、筆者の滞在中、建都された 1010 年にちなんだ 10 月 10 日のタンロン・ハノイ千年祭に向けた広告がハノイ市内各地に展開していた。そこでも、ゴクルー I 鼓の鼓面文様モチーフは盛んに用いられていた(図 10-1~4)。鼓面文様の一部である鳥も市内イルミネーションに使用されていた(同 5)。市内の看板製作店も鼓面文様を常日頃より前面に打ち出し(同 6)、タンロン城の門のモチーフと鼓面文様をミックスさせた千年祭向けの広告物を製作していた(同 7)。その他、様々なサイズの額装された鼓面文様レリーフが販売されており(同 8)、Phu tho 省にて宿泊したホテルでは同様のものがロビーに飾られていた。

鼓面文様モチーフはベトナム各所で使用されている、というのは事前に見聞きしていたが、おおよそ 2300 年前の銅鼓と建都 1000 年のタンロン城が、歴史的深度を同一線上に共有するものとして認識されるほどに多用されているのは、浸透度をうかがわせると同時に、上記モデル 1・2 の重層性が博物館以外でも顕著と言えそうである。

## 9. 銅鼓モチーフのメタ・アーケオロジー

上記した銅鼓のホー・チ・ミン像、神話、タンロン・ハノイ千年祭との結びつきは様々な問題を潜在的

には内包していると考えられる。考古学研究者の思考を規定する等、研究上の客観性に影響を与える可能性のみならず、銅鼓文化の長い歴史を鑑みれば、その過程で周辺少数民族のものとなった銅鼓文化が中央に盛んに呼び戻されているとも言え、長い歴史をもつ銅鼓はだれのものか、という議論が多民族国家ベトナムにおいて将来的には起きるかもしれない。もともと先史考古学ではグスタフ・コッシーナの先史学研究とナチズムの結びつきを教訓に、先史考古学が設定する「文化」と Nation との結びつきは常に警戒されていることでもあるが、その「文化」の内部は同質(排除の裏返しでもある)であることを半ば前提としており、Nationalism と同様のメカニズムが働くので、避けられないことでもある。

銅鼓モチーフが積極展開される広告物は、広義には現代のプロパガンダ・アートと捉えられるかもしれないが、ハノイ市内には過去のプロパガンダ・アート自体や、そのモチーフをもとにした製品を販売する店舗が存在する(図 11)<sup>13)</sup>。こうした店舗の主要ターゲットは、当初もっていた意味合いとは関係なしに、そうした絵柄がエキゾチックに思える外国人観光客であろう。こうした展開からは、自らの文化がどうみられているかに自覚的であり、Nation に単純に没入している訳ではなく、新たな利用形態を模索している様子もうかがえる。銅鼓モチーフを含む「広義のアート」が文脈を違えて利用されることも今後あるかもしれない<sup>14)</sup>。

## 10. 今後の課題

視座 1) からの玉文化の展開に関する研究は、あくまでも実見できた資料をもとにした素描段階と言える。本報告で示した製作工程案など、今後、洗練を必要とする部分も多いだろう。東アジア全体に視野を広げた場合には、中国における「管鑽」技術の展開や付随する文物の動態等が検討課題として挙げられる。視座 2) からの玉の色調変化や形態・サイズ変化に端を発する問題設定は端緒についた段階である。しかも、石材産地の推定<sup>15)</sup>をはじめとした、視座 1) における研究の積み上げが前提であるため、本格的に言及できるのはまだ先であろう。視座 3) からの銅鼓モチーフ利用のメタ・アーケオロジーは、こうした広義の考古資料活用の実態を記録し続けることと、常に Nation

との関係を補助線に検討し続けることが必要だろう。Nation との関係は強固だとしても、視座 1) からの研究はフィールド面で国際的な共同研究が必須となるだろうし、視座 2) の理論面も同様だろう。とすれば、国際的な共同研究を視野に入れた、文化資源学の基礎部分としての考古学研究自体が今後も一定の意味を持ち続けると考えたい。

#### 註

- 1) 遺跡を残した人々は基本的には不在だが、それらの人々との系譜関係を強く意識している人々との関わり方が問題になることがある。図 1 中ヒト型記号に破線と実線があるのはそのため。
- 2) 各文化の暦年代はあくまでもおおよそのものであり、議論が続いている。専ら放射性炭素年代の測定結果をもとに議論されることが多いようである。
- 3) 軟玉製の文字どおり玉製品以外に、これらの製品に影響を受けた石製品もあわせて扱う。
- 4) Phu Tho 省には二つの主要な博物館がある (図 2 中 A・B)。どちらも Phu Tho 省付近に中心があったと言われている「文郎国」の王「雄王 (Hung Vuong)」の名を冠した博物館である。
- 5) 後述の石鋸を用いた分割工程が含まれるかもしれないが、ここでは単純化している。
- 6) 図 6 には縄文・弥生時代人骨装着貝輪の長径の範囲が示されている。数値は安川 1988、木下 1996 の成果を基にしている。
- 7) 牙璋は暦年代推定の上でも重要資料である。
- 8) 図 8-4 は図 4-5・6 と類似する石器であるが、岡村秀典氏は穿孔具 (磨製石錐) としている (岡村 1993)。また、本稿で実用工具とした石錐と類似する図 8-5 を錐形玉器としている。工程復元案を左右するこの齟齬を解消するためにも、広範囲における比較検討が必要だろう。
- 9) 日本列島において弥生時代初頭に在来縄文人と渡来系の人々が混じり合い、それが現代本土日本人の直接の祖先であるという、埴原和郎氏の二層構造モデルになぞらえた仮説である。
- 10) その他、側切歯中心の抜歯種傾向が共通する風習抜歯も重要な要素だろう。
- 11) 銅鼓の型式学的研究等からは、中国雲南省が銅鼓製作では先んじていることがうかがえる (Imamura, 2010)。
- 12) 直接的にはホー・チ・ミンが国を守る必要性を説いた際に雄王を引いたことが大きく影響している。この発言自体、同一性を遡らせるモデル 2 的、とも言える。
- 13) ある店舗は、店員によるとベトナム人による経営であり、各地の民家が所有していたプロパガンダ・ポスターを引き取り、リプリントや絵柄をコピーした再製作・創作を行った後、販売しているそうである。
- 14) ベトナムのポスターコレクション図録 (Buchanan, 2009) 中、銅鼓モチーフは 1 例のみだった。頻用されるようになったのはいつごろか、というのも検討課題ではある。
- 15) Peter Bellwood らとともに台湾島産のネフライトの拡散について述べている (Hung et al. 2007) 台湾中央研究院・地球

科学研究所の飯塚義之氏によると、ベトナムにおける各種玉器の原材料であるネフライトの来源は、少なくとも 5 つはあるだろう、とのことである (東南アジア考古学会 2010 年度研究大会での発表による)。

#### 引用・参考文献

- Buchanan, Sherry. 2009. *Vietnam Posters -The David Heather Collection-*. Prestel : London.
- ハ・ヴァン・タン編著, 菊池誠一訳. 1991. ベトナムの考古文化 - 人類史叢書 12-. 東京: 六興出版.
- Han Van Khan. 2009. *Mot di tích khảo cổ đặc biệt quan trọng của thời đại đồ đồng Việt Nam*. Ha Noi : Nha Xuat Ban Dai Hoc Quoc Gia Ha Noi.
- Hung, Hsiao-Chun et al. 2007. Ancient Jades map 3,000 Years of Prehistoric Exchange in Southeast Asia. *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America* 104-50 : 19745-19750.
- Ikawa-Smith, Fumiko. 1999. Construction of national identity and origins in East Asia: a comparative perspective. *Antiquity* 73 : 626-9.
- Imamura, Keiji. 2010. The Distribution of Bronze Drums of the Heger I and Pre-I Types: Temporal Changes and Historical Background. *Bulletin of the department archaeology, the university of Tokyo* 24 : 29-44.
- 木下尚子. 1996. 南島貝文化の研究. 東京: 法政大学出版局.
- Matsumura, Hirofumi (ed.). 2006. *Anthropological and archaeological study on the origin of Neolithic people in mainland Southeast Asia*. Report of grant-in-aid for international scientific research (2003-05 No.15405018).
- Nguyen Lan Cuong & Nguyen Kim Thuy. 2003. Di cot nguoi co o Dong Dau (Vinh Phuc). *Van hoa Dong Dau -40 nam phat hien va nghien cuu (1962-2002) Ky yeu hoi thao khoa hoc-* : 88-96. Ha Noi : Nha Xuat Ban Khoa Hoc Xa Hoi.
- Nguyen Thi Kim Dung. 1996. *Cong Xuong va Ky Thuat Che Tao Do Trang Suc Bang Da Thoi Dai Dong Thau o Viet Nam*. Ha Noi : Nha Xuat Ban Khoa Hoc Xa Hoi.
- 岡村秀典. 1993. 中国先史時代玉器の生産と流通 - 前三千年紀の遼東半島を中心に -. 東アジアにおける生産と流通の歴史社会学的研究 : 3-23. 福岡: 中国書店.
- 坂井 隆・西村正雄・新田栄治. 1998. 東南アジアの考古学 - 世界の考古学 8-. 東京: 同成社.
- 渡辺 誠. 1983. 縄文時代の知識. 東京: 東京美術.
- 渡辺正気. 1958. 関東州文家屯の石器. 九州考古学 5・6 : 16-20.
- 安川英治. 1988. 第 3 章第 4 節貝製品. 伊川津遺跡 : 215-232.
- (ベトナム語の声調記号は省略した)